

反レイシズム運動における調査者の立場性

一橋大学大学院社会学研究科

松岡瑛理

1、目的

本報告の目的は、社会運動にかかわる「取材（調査）者」の位置取りを再考することである。従来、社会運動にかかわる研究者の役割は、たとえば対象とする組織や運動におけるいずれの立場にも与せず、運動の背後にある社会関係や全体性の原理を記述することに求められた

(A. Touraine[1978=83])。しかしながら、近年在日韓国・朝鮮人をターゲットに国内で存在感を高める草の根的なレイシズムに対抗する形で2013年度以降、出現した反レイシズム運動（通称・カウンター活動）において「中立的」な態度は非常に批判視されるものであった。社会調査における先人の取組や報告者自身との現場との関わりを再検討することで、フィールド調査における調査者の立場性や、調査成果の還元にかかわる問題提起を行う。

2、方法

報告者は2013年6月以降、参与観察とインタビューを中心に、関東（東京）・関西（大阪・京都）における反レイシズム運動に関わってきた。得られたデータを通じて（1）：現場における「中立性」「当事者性」の捉え方（2）：取材（調査）者に問われたこと（3）：（1）（2）との関わりを通して、報告者が獲得した位置取りを整理する。

3、結果

報告者は「中立的」な観察者であることを捨て、現場への積極的な協力関係を構築しつつカウンター活動に関わった。現場との信頼関係を構築するなかで、現地の人々が「取材（調査）者」ないし「社会学者」という存在をどのように見ているかが明らかになった。両者への視線は好ましいものばかりではない。報告者自身、現場の一員に徹することで「客観／中立的」に現場に近づく取材（調査）者に不信感を抱くこともあった。

近年、現場への実践的貢献を意識したり、積極的な立場表明をしながら調査を行う研究が増えていくがそのありかたはさまざまである。報告者は自身の経歴や専門性を生かしつつ、SNS ツールを使った調査成果の即時的な還元方法に行きついた。

4、結論

従来の社会運動論においては「現場」と「調査者」の間の区切りを維持しつつ、後者が前者の全体性の原理を描く図式が前提となっていた。本報告はそれに対し、報告者の実践事例を参考に、むしろ現場と調査者の立場を重ねなければ得られない情報や、調査成果の還元方法があることを提示した。社会学研究において、現場への実践的貢献はまだまだ附随的なものと認識されがちである。近接領域の議論との比較において、調査者の位置取りに関する問題提起をあらためて行った。

文献

Alain Touraine, 1978, *La voix et le regard—Sociologie permanente I—*, Seuil, (=83『声とまなざし 社会運動の社会学』梶田孝道訳、新泉社)